

油責めでした、(中略)早く牡蠣のうまい頃になればいいがとしきりに待ちます。

ビクターか何かの新しいのをお求めの由羨望の至りです、こいつが東京うちだと大いに借用に行くのだが神戸ぢや残念千万です、尤もここでもこの頃頻りに近所の蓄音機がきこへます、どこの家でやるのかまだ知らないがよほど手近い処らしく、ことにそれが二軒ぐらゐで持廻りで作るらしく、ある晩は西に聞こえある晩は東に聞こえといふ状態で、レコードは五枚ぐらゐるしかないらしく、曰く枯れすぎ、曰くカツボレ、曰く木遣と長唄の合の子みたいなもの、曰く箱根の山は天下の嶮。……といったもので、同じものを幾度となく繰返すし、何時やらうと、やる家が変わらうと、勇ましく聞えて来るのは、枯れすぎでありカツボレであるのだから助かりっこはない。久しくなやまされた裏の娘さんのチクゼンピワ節の夜毎の弾奏がこの頃幸ひに中止になったら、相変つて枯れすぎといふ大敵が現われたわけです、殊にあさましいときへ感ずるのは、真夏白昼午前十時といふ刻限に憶面もなくやりだすカツボレです。誰であつたかこの頃新聞に、近所に持ちたくないものは、ピアノの先生の家、子供が朝から晩まで太鼓をたたく家、俗悪なチクオンキを始終やる家……といふやうな事を言つてゐたが、俗なレコードには誰しも悩まされるものと見えます、神戸の家でも御近所から苦情が出ないよう、またビクターのメシンが泣くやうなレコードは一切かけないやう御注意なさるべし。いいレコードを少しやることは人助けであり劣等なレコードを繰返し／＼する事は精神的人殺しであります。おと、しの前の年の夏の宵のこと、よく覚えてゐます。あの夏の事はい、につけ悪いにつけかなりはつきり覚えてゐます。いろ／＼な理由からあんなに苦しみもだえた事はなかつたから。カルーソー

の太々しいソロを聞きながらも、ペーターベンの何番かのシンホニーに耳を傾けながらも絶えず私の頭の中にはさまざま／＼な考えが乱れ打つて動いてみました。あの夏こそ真底から笑ひを失つてゐました、それが、今はもう、何もかもケロリとあきらめて、ハハと微笑に代へ得られます。人間全く勝手なものです。

地震の一週年が近づいてきました。(中略)それ去年の地震を思ふ事は、どういふものか一種のい、なつかしさがありません、これは、自分が家もつぶれず火事にも会はず近親の誰一人に生死の不幸も起らず、要するに地震にはうんと揺られながら比較的傍観的位置にゐられたからだらうと思ひますし、また地震にあれほどの長い間の不安苦痛をなめさせられてゐながら、先方が全く自然といふものであつて、そこに少しも人為的のものがなかつたから、あれほどおどろかされ不便をしのばされ心配させられてもそこに少しの怒りも不快も感じなかつたゆゑかもしれませぬ。(中略)十三日に横浜へ伯母一族の安否をさがしに出かけた事も忘れがたいなつかしさです、ワイシャツにズボン、ゲートル、草鞋、握飯に水筒を持って竹杖をついて品川からトロッコの上のせられて行つて見た横浜はその数日前見た東京の焼跡よりも惨憺としたものでした、その中を知らない町の焼跡に働く三人五人の人に探ね／＼して、それでも運よく濠割の舟の中に救はれてゐた伯母をさがしあてた時は、さすがに罹災者の佻しさ惨めさを味はされました、がその夜またトロッコ列車で品川へつき、明るい電燈の光や、どことなく生き／＼としてゐる人の動きを見た時には、直に、震火の禍をまぬかれた地点に住む幸福に雀躍りしてゐました、人間の心は全くさまざま／＼です。あの落着を失つた不安な生活気分をさへ、一年過ぎた今は、寧ろなつかしいもの追想しつゝ、その事に享樂をさへ見出す私のやうな人間さへあります。